

報 告

お菓子の家の創作授業を通じた食育、人材育成、 地域連携の取り組み

木村 久江 加来 卯子 谷崎 太 中島 俊介

＜要 旨＞

本稿では、短期大学の食育分野の学習題材のひとつである「お菓子の家」(ジンジャーブレッドハウス)の制作作品を、学生が中心となって学外で展示発表会や制作講習会を行うことによって、地域連携を実践するという能動的体験型学習(アクティブラーニング)における学修者の変化と地域貢献の成果を明らかにすることを報告の目的とする。学生は発表会や講習会における来訪者との交流を通じてコミュニケーション力などを伸ばすと同時に、それが社会において必要であることを経験できた。学生自らがチームワークを発揮して企画することにより、聞くだけの授業にとどまらない体験型学習を実現し、食育とともに人材育成面でも一定の成果が見られた。この一連の取り組みは地域の自治体や近隣企業と連携して行ったものであり、企画した発表会の一部が北九州市の地域活性化の取り組みである「平成27年度にぎわいづくり認定事業」「平成28年度まちづくりステップアップ事業」としても認定され、地域社会への貢献も認められた。

キーワード：お菓子の家、食育、人材育成、地域連携、アクティブラーニング

1. 目的

筆者ら(2015)は「お菓子の家(本学ではジンジャーブレッドハウス)」の創作授業¹⁾にこれまで取り組んできた。それは菓子製造が過去から人間の生活に潤いを与え、食文化を如何に豊かにしてきたかを、欧米の伝統的な菓子であるジンジャーブレッドハウスの制作を通して学生により意識させるためであった。授業では、まずお菓子の家の歴史や、キリスト教祝祭菓子としての文化的役割について伝え、その上で、19世紀のヘンゼルとグレーテルの童話の時代から続くお菓子の家のレシピを紹介した。制作にあたっては、学生個人が菓子デザイン、素材寸法決定などを自ら行うことで各自のオリジナルの作品制作が行えるように指導した。併行して、「お菓子の家」が、西欧の家庭でクリスマスに親子で作ることに意義があったように、実際に友人や家族で菓子作りを食育体験させることにより、チームワーク(協働)の大切さも実感できるよう配慮

した。このように創作した学生らの作品を、学外で展示・発表することを試みた。それは、授業で聞くだけにとどまらない体験型の学習の場を提供すること、ならびに調理製菓スキルの向上だけではなく、会話、討議、企画などのコミュニケーションの能力を向上させる場を提供することをめざしたかったからであり、学生が能動的に企画し、参加できる場として展示発表会が最適であると考えたからである。

具体的には、学生に協働でチームワークを発揮させながら企画・立案・調整させ、展示発表会を体験型学習の場と位置づけた。単に作品を展示するだけでなく来訪者へのインタビューなどを工夫して行うことにより、学外の面識のない市民の方たちとのコミュニケーションを図りながら、展示会をフィールドワークの場とすることで、学生達の気づきの場としても活用した。

また、来訪者との「ミニチュアお菓子の家」制作体験交流や制作講習会のイベント企画などを展示と併行して行うことで、地域社会の方たちへ食育体験の場を

発信・提供することができた。また児童や若い父母を対象にしたものでは、食育だけでなく、子育て支援や家庭教育の経験の場を提供でき、学生の児童教育の体験の場としても意味あるものとなった。

今回は、アクティブラーニングとして学生にどのような力を伸ばせるか、地域連携や貢献の成果をどのように学生に意識させ大学への貢献感や所属感を醸成できるかの二つの点を踏まえて、今までの学習過程を改善、整理することを試みた。

これまでの一連の取り組みは自治体や地元企業と一緒に行ったものであり、地域連携の分野で、平成28年度の北九州市が主催する「まちづくりステップアップ事業」として採択され、本学の教育研究活動を地域社会へ還元する一助となった。また本報では、地域連携による貢献が高等教育に求められている使命のひとつであることにとどまらず^{2) 3)}、「お菓子の家」の卒業制作とその展示会を通じた活動を、聞くだけの授業から学生が能動的に参加できる体験型学習（アクティブラーニング）の教育方法改善⁴⁾の取り組み例として報告するとともに、関連して行ってきた「お菓子の家」以外の地域連携、交流の取り組みを行ったことについての実践内容を整理、検証することを目的とする。

なお、地域連携の活動の効果については、平成24年度の「開かれた大学づくりに関する調査研究⁵⁾」（文部科学省）において、対象短期大学280校中48.9%が「学生への教育効果が創出される」と回答している。また岩崎らの実践報告⁶⁾によれば、体験的に取り組んだ地域連携型授業によって、交流、行動、協働、思考の力を伸ばすことができたとしている。本報告においても、地域連携の体験型学習を通じて得られる人材育成面での教育効果についても併せて紹介する。

II. 方法

アクティブラーニングの内容として以下の内容を設定してその効果を検討することとした。効果の測定には内容ごとにアンケートを実施してこれを分析した。

1) 「お菓子の家」の展示発表会を通じた参加型体験学習の取り組み

(1) 「お菓子の家」の卒業制作作品を用いた校外活動

「お菓子の家」の卒業制作と展示発表会を通じた体験型学習の取り組みは、2012年度卒業生から4年間毎年行っており、2012年度生作品3施設、2013年度生5施設、2014、2015年度生は8施設で展示発表会を実施した。表1にお菓子の家を通じた校外活動を表2に2015年度卒業生の作品展示会の実施内容を一覧にまとめた。

表1. お菓子の家（卒業制作作品）を通じた校外活動

活動名	実施時期	概要	学生の能動的参加の視点	協業分野
「お菓子の家」卒業制作及び展示発表会 総合テーマ 夢と創造の世界を ～お菓子の家づくりで異文化を知ろう～	2012.12～ 2016.4 24施設にて	・お菓子の家の制作 ・お菓子の家の展示発表 ・企業等のイベント講座での教育指導 ・自治体事業への参加	・展示発表会の企画 ・自ら発表テーマを決め各年次でオリジナリティを模索 ・実際の展示先に合わせた気づきとカスタマイズ	地域連携 産学連携 国際交流 (異文化交流)
トヨタホーム福岡 「お菓子の家」を作ろう講習会	2014.4.29	講習会に参加する各親子の実習指導助手として講習会に参加	知識や技能をもとに消費者の体験イベントの支援企画	産学連携

表2. 2015年度卒業生作品による展示会活動

開催場所	開催テーマ	時期	概要	学生の能動的参加視点	
小倉井筒屋本館8階 (北九州市小倉区)	童話の世界で心豊かに	2015.12	・デパート内共用スペースにおける作品展示 ・「ミニチュアお菓子の家のデモンストレーション」と題し、親子の参加を募り、ミニチュア版お菓子の家の制作講習を行った(展示会と同時開催)	・展示発表会の企画と満足してもらう工夫 ・児童に喜んでもらう講習会企画の工夫 ＜フィールドワークとして＞ ・来訪者の展示に関する感想を調査・交流 ・来訪者作品への評価や嗜好を調査・交流 ＜にぎわいづくり事業への参加＞ ・にぎわいをつくるには	地域連携
福岡銀行 北九州営業部2階 ロビー (北九州市小倉北区)	オリジナルツリーとともに 童話の世界で心豊かに	2015.12	・福岡銀行オリジナルクリスマスツリーとお菓子の家卒業作品を共同展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った(展示会と同時開催)	・福岡銀行オリジナルクリスマスツリーのレイアウトとのコラボを考える ・展示発表会の企画と満足してもらう工夫 ・児童に喜んでもらう講習会企画の工夫 ＜にぎわいづくり事業への参加＞ ・にぎわいをつくるには	産学連携 地域連携
北九州市水環境館 (北九州市小倉北区)	童話の世界で心豊かに	2016.1	・水環境館共用スペースでの作品展示 ・「ペーパークラフト及び段ボールによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った(展示会と同時開催)	・展示発表会の企画と満足してもらう工夫 ・児童に喜んでもらう講習会企画の工夫 ＜にぎわいづくり事業への参加＞ ・にぎわいをつくるには	地域連携
小倉城内 (北九州市小倉北区)	国際交流をしましょう アジアの人の知らない世界	2016.5 ～ 2016.6	・小倉城4F市民の大広間における作品展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家制作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った(展示会、国際交流イベントと同時開催)	・来訪者の属性にかかわる調査(気づき) ・お菓子の家を通して、外国人との交流の場とする企画 ・展示発表会の企画と満足してもらう工夫 ・児童に喜んでもらう講習会企画の工夫 ＜まちづくりステップアップ事業への参加＞ ・にぎわいをつくるには	国際交流 地域連携
高齢者複合施設 「ふれあいの里とばた」	お菓子の家で癒しの空間を	2016.2～ 2016.4	・高齢者複合施設における作品の展示と施設の慰問	・お菓子の家の作品を通じた慰問 ・敬老の視点	地域連携
北九州市立医療センター 北九州市八幡病院内 健和会大手町病院内	お菓子の家で癒しの空間を	2016.2 ～ 2016.4	・病院共用スペースにおける作品の展示 (作品は、一部ずつ分けて展示)	・病気の方たちへの慰問の視点 ・小児病棟への慰問	地域連携

(2) 作品の展示発表会を通じてめざした参加型の体験学習の場

発表会の場所の選定、貸出の交渉、会場設営などについては、学生と教員が共同で企画した。場所は、デパート(小倉井筒屋)、銀行(福岡銀行北九州営業部)、北九州市水環境館、小倉城、高齢者複合施設、病院(小児病棟・小児外来)といった市内の施設である。それぞれの発表会の企画にあたっては、各々の発表会の場所や見学者を意識しながら発表会のテーマを決めた。発表会の意味合いや特徴を考え、実行にあたり自分達が注意すべきこと、取り組み姿勢などについて全員で話し合い、目的意識を共有化しながら行えるように準備した。

2) 学習内容に能動的に参加させ、コミュニケーションスキルを高めるための手続き

いくつかの発表会においては、展示するという目的に加えて、来訪者と交流することをもう一つの目的とした。アンケート形式の質問を準備し、それを聞きとるという形式にすることで、面識のない来訪者との対話が行いやすいように工夫し、学生にとって、フィールドワークとしてインタビューするという要素を加え

た。これは、来訪者の意見や評価を聴取することで臨機応変に会話の内容を広げ、年齢の離れた方や外国人の方などの幅広い来訪者との交流を深めることを狙ったからである。

3) 外部へのアピールを通じて大学への所属感や貢献感を高めるための手続き

交流に加えて、参加型の体験企画も行った。展示会における親子の参加者を募り、1) ミニチュアのお菓子の家のデモンストレーション型制作体験企画(小倉井筒屋での発表展示会で併設) 2) ペーパークラフトを用いたお菓子の家の設計・装飾体験企画(福岡銀行北九州営業部の発表展示会に併設) 3) ペーパークラフトや段ボールを用いたお菓子の家の設計・装飾体験企画(北九州市水環境館の発表展示会に併設)などのイベントも行った。これは、学生に児童や児童教育の要素を体験することを企図したものであった。

一連の展示発表会において企画した体験学習の内容は、次にまとめられる。

(1) 作品の展示発表; 単独展示、評価コンテスト、同種の展示イベントとのコラボ(オリジナルクリスマスツリー展示会)

- (2)作品展示による慰問；高齢者複合施設や病院（小児病棟・小児外来）
- (3)フィールドワーク；来訪者へのインタビュー、会話交流、嗜好調査、外国人との交流
- (4)食育連携；「お菓子の家」のミニチュアやペーパークラフトによる「お菓子の家」の制作体験
- (5)地域連携；街のにぎわい支援、街づくり支援

これらはいずれも、学生の大学名を冠した企画であり、学修者の大学への所属感や貢献感を高めるための手立てである。またアクティブラーニングの主題である学生自身が何をするかを事前に考え、それに能動的に参加し、自分が何をしているかを再認識しながら、新たな気づきを得ることの手立てでもあった。これらの点から、卒業作品の制作と展示に至る一連の活動は、聞くだけの授業から一歩抜け出し学生を動機づけられた参加者へと支援する教育の取り組み⁷⁾の一例として、「アクティブラーニング」を検討する事例のひとつとなるものと考えられる。^{4) 8) 9)}



図2. 福岡銀行北九州営業部オリジナルツリーと共同展示

Ⅲ. 結果と考察

1) 展示発表会の事例紹介と参加型体験学習における活動結果

前項表2に示した展示発表会の様子を図1から4において写真にて紹介する。この内、2015年度に実施した来訪者が多かった市内デパート（小倉井筒屋）と展示期間の長かった小倉城の2例について取り上げて説明したい。



図1. 小倉井筒屋 展示風景



図3-1. 北九州市水環境館
ペーパークラフトお菓子の家の制作体験イベント



図3-2. 北九州市水環境館
段ボールお菓子の家の装飾体験イベント



図4. 小倉城展示風景
(壁のハートマークの中に自由表記の感想添付)
(図1～4の写真掲載承諾済み)

小倉井筒屋内では12月に6日間展示を行い600名の来訪者があった。その間「ミニチュアのお菓子の家のデモンストレーション」と題して、ミニチュアのお菓子の家の制作講習も行った。学生が分担して来訪者一人一人にインタビューを行い、作品への嗜好や個別感想を聞き、制作上の工夫や苦労話などを伝えながら見学者との交流を行った。聞き取りは無記名での回答をお願いした。フィールドワークの一貫として、来訪者に関すること(時間帯傾向、年齢、性別、居住地、来訪目的など)も調査し、統計データを用いてまとめた。フィールドワークは、体験型学習の大切な手法かつ要素であり、統計データを用いて結果を表現することは重要で、授業の一貫として行っている。統計的な表現手法や技術についての習熟と能動的な学習参加の観点から、福岡県・福岡県統計協会が主催する福岡県統計グラフコンクール「第5部 高校生以上の生徒・学生及び一般の部」に2013年～2015年まで連続して応募している。3年連続一部応募者は佳作入賞の結果を出しており、能動的な学習参加への意欲を高めることに役立っている。

小倉城では、5月に約1ヵ月間の展示を行い、584名の来訪者があった。来訪者の多い土曜日、日曜日に、全員で分担してインタビューを行った。小倉城の場合は、基本的には域外からの訪問者であり、多くの外国人の来訪者もあることから外国人との交流の機会としても積極的にフィールドワークに臨んだ。(実際には来訪者の9.9%が外国人であった。)ちなみに上述のデパートと同じ2015年度生の作品を用いて2016年5月にも約1ヵ月間の展示を行い、この時は夏季の温度環境を考慮して「ペーパークラフトによるお菓子の家の制作イベント講座」と題して、親子でお菓子の家を厚

紙の模型を使って制作するイベントを行った。

いずれの場合も、来訪者とは簡単な質問をする事をきっかけにしながらインタビュー方式で会話を深め交流した。作品の評価については、感想として選択肢方式と自由表記方式で且つ無記名での回答をお願いし、当てはまる内容や文言を結果にまとめた。また、自分が最も好きな作品について質問し、学生間でその評価結果を参考にした。



図5. 来訪者へのインタビューによる作品の感想(無記名回答)
(小倉井筒屋来訪者 600人 小倉城来訪者 584人
に対する回答数の比率)



図6. 回答者の年齢構成分布
(有効回答比率 小倉井筒屋 97.7%、小倉城 98.3%)

まず来訪者が作品を見てどのように思ったかについて、図5に示すように「可愛い」「夢がある」など10個の選択肢を提示し、その中で来訪者の感想と同じものを回答してもらった(複数回答を可とした)。小倉井筒屋、小倉城ともに同様の方法で回答をもらい、その結果を各場所の来訪者総数(小倉井筒屋600、小倉城584)に対する比率にて示した(図5参照)。また回答者の年齢分布について図6に示した。図6に示すように来訪者の年齢構成や男女比が異なるなかで、いずれも半数以上の方が「かわいい」「夢がある」と回答し、

「心が癒される」とした人は4割を超えた。また一方で、自由に感想を記述するようお願いしたところ、入場者の内、小倉井筒屋49%・小倉城68%の方に足を止めてその場で自由表記の記載を記入してもらうことができた。この自由表記には、「心が癒され優しい気持ちになった」「作品の技巧と手間への賞賛」「製作者への激励と共感」「楽しさと豊かさの正直な実感」などがあり、これらの感想は学生に達成感、満足感を与えるものになった。このときの記載内容の抜粋を表3に示す。

表3. 来訪者が記入した感想 ～無記名方式による回答～

2015年小倉井筒屋 294名の自由表記の一例(入場者の49%が記載)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・作品を見て心が癒された、楽しい気持ちになった。手間と愛情が詰まっている。 ・丁寧に、細かなところまで、工夫して良く作られている。可愛くて心が和んだ。 ・自分でも作りたくなった。作り方が知りたい。食べたくなってきた。 ・こんな素晴らしい作品を作れる学生さんに会いたくなった。これからも続けてほしい。
2015年小倉城 372名の自由表記の一例(入場者の68%が記載)	
	<ul style="list-style-type: none"> ・優しい気持ちになる作品ばかりです。このまま創造力豊かな人間になってください。 ・次回は、アフリカや児童養護施設の子供たちに送ってやってください。 ・初めて見たけれど、どれもかわいくて好きになりました。今度作ってみたいです。 ・お菓子の家が街になっていて可愛かったです。楽しく見せてもらいました。

2) 体験学習に参加した学生の感想記述の分析結果

卒業作品の制作、展示を通じた、学生達の感想について無記名で回答をもらい、表4に抜粋しまとめた。

学生の自由表記から抽出された内容からは、自己に対する「能力感・自己肯定感の向上」と「貢献感の向上と実感」、他者や地域に対する「信頼感・所属感の向上」が伺える。これら学生達の感想から、一連の展示会において学生自身が得た達成感や満足感の要因は、インタビューにおける自分達の作品への共感や称賛であったことはもちろんのことであるが、加えてコミュニケーションそのものができたこと、自分の話を他人が聞いてくれたことや説明できたことに驚きや喜びを感じていることが分かる。お菓子の家という苦労して制作した作品を単に見てもらえたことだけでなく、来訪者との双方向のやり取りができたことが、学生達の成功体験を作っているということだと思う。短期大学生にとって、見ず知らずの人と話をする機会は授業において得難いものであり、特に年齢の離れた成人と会話することそのものが、これまであまり経験が無いことであった。学生達は、自分の知らない他人との交流において、自分から話ができたと、聞いてもらえたこと、温かい言葉をかけたもらったこと、意見がもらえたことなどに達成感を感じており、「コミュニケーション力」「傾聴力」「会話力」などが社会において必要であることを経験として知ることができたと思われる。

参考までに当学院短期大学部にて每期行っている授業評価アンケート報告書の2015年度後期における達成度自己評価よれば、「コミュニケーション力や表現力を高めることができた」の項目に対して、短期大学部

表4. 学生の感想(参加全学生10人の感想を各視点で抜粋) ～無記名方式による回答～

	感想の記載の抜粋
自分自身で作品が完成できたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・形、装飾、など、自分で考えたものが形になって飾られて良かった。 ・図から実際の家の組み立てができた時には、嬉しかった。 ・何度も壊れそうになって、それを立て直して完成したことが、一番の達成感。
自分自身で努力し成長できたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・なんどもあきらめずに作り直せたことに自分の成長を感じた。 ・目標に向かって集中することができた。 ・最後まであきらめずに作りとおせたこと。工夫ができる自分が見えた。 ・どうやれば可愛くなるかを考え、努力した。
作品に関心をもち褒められたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・「かわいい」「すごい」との反応が嬉しかった。見ている人が笑顔になるのが嬉しかった。 ・想像以上におおくの人に見てもらえたこと、ほめてもらったことが頑張って良かった。 ・市民の方に、温かい言葉をかけてもらい、頑張って良かったと感じた。 ・子供に喜んでもらえて良かった。
知らない人たちの交流ができたこと	<ul style="list-style-type: none"> ・褒められたり自分の話を真剣に聞いてもらえて、嬉しかった。お菓子の家以外の話もできて良かった。 ・自分の学校の名前が広く知られていることが分かって良かった。 ・思っていたよりもおおくの人にアンケートに答えてもらって良かった。 ・いろいろ尋ねられて、感想もくれて、話ができ良かった。

の全講義の自己評価平均点が3.5、生活創造学科の全講義の評価平均点3.5に対して、当該授業においての自己評価平均点が4.6であった。演習授業においても同じ項目の自己評価において、短期大学部の全演習授業の自己評価点平均が3.7、生活創造学科の全演習の自己評価点平均3.8に対して、当該演習の自己評価点平均は4.6であった。あくまで自己評価ではあるものの、コミュニケーション力や表現力には達成感に裏付けられた自分自身に対する自信は大きな要素であり、学生の態度から、発表会の体験がその個人的な力を向上させたことが見て取れた。

展示発表会の準備実行に関して、学生自らが企画していることで「能动性」「企画力」を養い、さらに全員が分担して行ったことで「協働性（チームワーク）」「行動力」を伸ばすことができ、フィールドワークの結果である来訪者のデータを統計グラフにまとめをしていくことで、「思考力」についても向上の機会を得ることができたと思われる。

以上から、授業にとどまらない体験的な学習を通じて専門スキル（調理製菓スキル）以外の実践的な活動のスキルの向上を図り社会性を高めるという観点から、展示会を通じた一連の体験学習の取り組みは人材育成面で一定の成果があったと思われる。

3) 体験学習を通じた所属感や貢献感への影響

(学生の大学への所属感や貢献感に良い影響を与えたと予想できる事績)

お菓子の家の展示会とそれに付随する体験学習の取り組みが参加した自治体事業（表5）について報告したい。民間団体で北九州市が事務局を務める「北九州

市にぎわいづくり懇話会¹⁰⁾が主催する北九州市にぎわいづくり認定事業において、平成27年度に行った3つの展示会とそれに付随して行った制作講習会のイベントが、まちのにぎわいにつながり人出を促し、自立して今後も継続が見込まれるという観点で、北九州市にぎわい事業のひとつに採択され、助成を受けた。

また、北九州市からは、平成28年5月に小倉城で行った展示会とお菓子の家の制作イベントとそれに加えて、今後平成28年12月以降に小倉北区で開催を予定している作品展示会やお菓子の家の制作イベントが、平成28年度の「まちづくりステップアップ事業¹¹⁾」として認定され、助成を受けている。これは北九州市が、地域住民の交流の促進となる活動、まちづくりにつながる研修等の活動、国際交流の促進にかかわる活動等を支援する事業である。本学の体験学習の試みは、年10回にも満たない限定的な規模であるが、2012年から毎年学生達が自主的に継続して活動に取り組んだことが評価され、自治体から一定の地域社会貢献を認められたものと考えられる。

このほか、お菓子の家の卒業作品を通じた体験学習の他にも、調理実習にかかわるテーマから深化した同様の体験学習の試みを行っており、これについて表6にまとめる。

言うまでもなく、これらの活動は、学生の希望にもとづき学生と教員が企画した実習である。

例えば表上段の活動は、地域の高齢者向けの給食活動の実状を知るために、地域の市民センターにおいて行う配食サービスで調理職員の方々と調理実習体験を行ったもので、過去5年間毎年行っているものである。ここでも「お菓子の家」の展示会同様に、各センター

表5. 自治体主催事業への参加による認定取得

事業名	活動期間	認定されることとなった本学の体験学習	認定対象となる活動	協業分野
「平成27年度 にぎわいづくり認定事業」 北九州市にぎわいづくり懇話会主催 認定事業名： 子供に夢と想像の世界を～お菓子の家を通して異文化を知ろう～	2015.12	・小倉井筒屋デパート内共用スペースにおける作品展示 ・「ミニチュアお菓子の家のデモンストレーション」と題し、親子の参加を募り行ったミニチュア版「お菓子の家」の制作講習会（展示会と同時開催）	・まちのにぎわいにつながる活動 ・自立して継続が期待される活動	地域連携
	2015.12	・福岡銀行オリジナルクリスマスツリーとお菓子の家卒業作品を共同展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家製作のイベント講座」と題し、来訪親子の参加を募って行ったペーパークラフトの「お菓子の家」の制作講習会（展示会と同時開催）		
	2016.1	・水環境館共用スペースでの作品展示 ・「ペーパークラフト及び段ボールによるお菓子の家製作のイベント講座」と題し親子で参加を募り行ったペーパークラフトのお菓子の家の制作講習会（展示会と同時開催）		
「平成28年度 まちづくりステップアップ事業」 北九州市市民文化スポーツ局主催 事業認定名： 夢と想像の世界を～お菓子の家づくりで異文化を知ろう～	2016.5 ～2016.6	・小倉城4F市民の大広間における作品展示 ・「ペーパークラフトによるお菓子の家製作のイベント講座」と題し、親子でペーパークラフトのお菓子の家の制作講習を行った（展示会、国際交流イベントと同時開催）	・地域住民の交流の促進となる活動 ・まちづくりにつながる研修会等の活動 ・国際交流の促進に関する活動	地域連携
2016.12 ～2017.1 (予定)	・平成27年度同様に、平成28年度に小倉北区にて開催予定の展示発表会ならびに、それと併行して行われる講習会に対して			

表6. 調理実習から深化した校外活動

活動名	実施時期	概要	学生の能動的参加の視点	協業分野
高齢社会を良くする北九州女性の会	2012.8、2013.8、2014.11、2015.1、2015.12	各市民センターの配食サービス施設にて集団で調理実習体験を行った（一枝市民センター、中井市民センター、到津市民センターにて実施）	地域の高齢者向け給食の実状を知るために、市施設との共同調理実習を企画	地域連携
テーブルマナー講習会	2012.7～2016.7 毎年1回	西洋料理講座、中国料理講座 リーガロイヤルホテル小倉にて、実際の料理を試食しながら実習した	授業におけるテーブルマナー知識を実際に体験したいと考え、ホテルのパーティ担当に相談企画	産学連携
コーヒーの淹れ方講習会	2013.1	極東ファディ株式会社の北九州マイスターである珈琲専門家と共同で「おいしいコーヒーの淹れ方」について実習した	授業におけるコーヒーに関する知識を広げるために、食品会社のコーヒー専門家による共同演習を企画	産学連携

での調理職員とのコミュニケーションが実状の理解には重要であり、企画実施には学生間のチームワークが大切であるなど学びの深化として有意義である。同時に、地域社会との連携となることは言うまでもない。企業との間でも、「お菓子の家」の制作講習会を企業のイベントとコラボして行ったケースもある。（表1参照）また、学びの内容を深く掘り下げるために、専門性の高い企業に講習会の依頼を企画したケースもある。（表6参照）これらはいずれの場合も、地元企業との連携や交流を図ったという意味で、産学連携への発展要素を含むものであると思われる。

4) 体験学習の要素を深めた実践結果

最後に、体験学習の経験の中で、学生が能動的に学外コンクール等へ参加したことも紹介しておきたい。

先述の学生自らが授業で取り組んだ統計を用いた表現技術の向上のために能動的に参加した統計グラフィコ

ンクールの様に、年次によっては、授業で取り組んだ題材などをもとに学生自ら学外のコンクールに参加した（表7参照）。2015年以降の北九州市の地域連携事業に参加、認定される以前の取り組みが中心となっているが、体験学習の経験によって、学生が能動的に参加してきたものである。どのような学びの構造が学生の「自発性」を引き出すのか、残された課題は多いが、聞くだけの授業にとどまらず積極的に対外的な参加を行うことは、学生の自発性・社会性を高めさらに学びを深めるものであり、今後もこのようなアクティブラーニングの視点を入れた体験学習を授業に活用していきたい。

表7. 学生の能動的な学外コンクールなどへの参加

出品参加活動名	実施時期	学生の能動的参加の視点	概要	協業分野
統計グラフィココンクール 総務省統計局主催	2013.11～ 2015.11 毎年参加	展示会における来訪者へのインタビュー結果を統計を用いて表現する技術を高めることを目的に、学生で自主的に参加	総務省統計局主催の福岡県統計グラフィココンクールに各自で出品 一部作品で、佳作入賞。	地域連携
「ロールケーキコンテスト」への参加 北九州市菓子組合主催	2012.6 2013.6	コンテストの情報に基き、学生で自主的に参加	2012年「ロールケーキのお菓子の家」の題材で制作参加。学生賞受賞。 2013年「北九州市制50周年記念ロゴマーク」のテーマで制作参加。	地域連携
「キャラ弁コンテスト」参加 北九州市主催	2012.7	コンテストの情報に基き、学生で自主的に参加	各自のアイデアに基いたキャラ弁制作参加。学生賞受賞。	地域連携
「TOMODACHIキャラ弁コンテスト2014」 農林水産省主催	2014.1	コンテストの情報に基き、学生で自主的に参加	各自のアイデアに基いたキャラ弁制作参加。感謝状受賞。	産学連携
第2回八味唐辛子レシピコンテスト 株式会社サガミチェーン(愛知県)主催	2014.8	コンテストの情報に基き、学生で自主的に参加	各自のアイデアに基いた八味唐辛子レシピを参加発表。学生賞受賞。	産学連携

5) 考察

実習授業において創作した「お菓子の家」の卒業作品の展示発表会を学生が自ら企画・立案し、学外にて行った。作品展の来訪者とのコミュニケーション交流やフィールドワーク交流および作品展と合わせて企画したミニチュアお菓子の家の制作講習会での体験交流を通じて、展示発表会を授業で聞くだけにとどまらない体験学習の場とすることができた。

展示発表を振り返った学生の自由記述から、コミュニケーションスキルの向上が伺えた。また、自己に対する「能力感・自己肯定感の向上」「貢献感の向上と実感」および他者に対する「信頼感・所属感の向上」が示唆された。同時に、展示会の準備を通じて「企画力」「協働性（チームワーク）」を伸ばすことができた。このように、体験型学習への参加が学生の専門スキル（調理製菓スキル）以外の実践的な活動のスキルの向上を図り、学生の自発性・社会性を高め、人材育成面で一定の成果があった。

一連のこれらの取り組みは、地域連携の分野で、平成28年度の北九州市が主催する「まちづくりステップアップ事業」に認定され、地域社会へ本学教育研究活動を還元する一助となり学生の大学への所属感や貢献感を高めるに至ることが示唆された。

聞くだけの授業にとどまらず積極的に対外的な参加を行うことは、学生の自発性・社会性を高めるものであり、今後もこのようなアクティブラーニングの視点を入れた体験学習を授業に活用していきたい。

謝 辞

展示発表会の趣旨にご賛同いただき、当校の建学の精神である「感恩奉仕」にご理解いただき、学生に発表の場を提供いただきました株式会社井筒屋、福岡銀行北九州営業部、北九州市水環境館、小倉城の皆様にご心よりお礼申し上げます。

本ゼミ活動研究において平成28年度の助成金の申請にあたりご指導を賜りました本学短期大学部長 戸田由美先生に深く感謝いたします。また、ゼミの運営に協力していただいた本学科、教育支援職員の片山美絵子氏、山村紀子氏に感謝いたします。

なお本ゼミ活動研究は、平成27年度「にぎわいづくり認定事業」（北九州市にぎわいづくり懇話会主催）、平成28年度「まちづくりステップアップ事業」（北九州市主催）の助成を得て行ったものである。

参考書籍及び文献

- 1) 木村久江ら：「お菓子の家」ージンジャーブレッドハウスの歴史と創作ー、西南女学院大学紀要、19：pp.141-147、2015
- 2) 中央教育審議会大学分科会、「短期大学の今後の在り方について」（審議まとめ）、平成26年8月6日
- 3) 中央教育審議会大学分科会、「新しい時代を切り拓く生涯学習の振興方針について」（答申）、平成20年2月19日
- 4) 中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」（答申）、平成24年8月28日
- 5) 文部科学省、「開かれた大学づくりに関する調査研究」に関する報告書、平成25年3月
- 6) 岩崎暁ら、「地域連携型授業の実践報告」、JIYUGAOKA SANNO College Bulletin、46：pp.59-73、2013
- 7) 岩井洋、初年次教育におけるアクティブラーニングの可能性、リメディアル教育研究、1：pp.22-28、2006
- 8) 入江詩子、アクティブラーニング導入期における参加型学習の役割、地域総研紀要、13：pp.23-34、2015
- 9) 久保田恵ら、地域連携協働事業の教育効果と地域貢献事業としての評価、岡山県立大学保健福祉学部紀要、22：pp.13-25、2015
- 10) 北九州市ホームページ、北九州市にぎわいづくり懇話会について、<http://www.city.kitakyushu.lg.jp/san-kei/09600144.html>（取得日2016年9月11日）
- 11) 北九州市ホームページ、北九州まちづくりステップアップ事業、http://www.city.kitakyushu.lg.jp/shimin/file_0150.html（取得日2016年9月11日）

Approaches to Food and Nutrition Education, Human Resource Development and Community Collaboration Through the Original Class of “Confectionary House”

Hisae Kimura, Shigeko Kaku, Futoshi Tanizaki, Syunsuke Nakashima

< Abstract >

This report is intended to show result of improvement of the learner and regional contribution through approaches of active learning to practice regional partnership by making “Confectionary houses (gingerbread houses)” and planning their display and presentation outside this junior college in association with similar events (such as a class for making miniature confectionary houses) in which students played a key role. Confectionary house making is a subject of study in our junior college. It was observed students increase their communication skills through interchanges with visitors in the display presentation and similar events, which allows them to recognize the of communication necessity in the society. Those plans performed actively showing their teamwork realized a passive class of experience-based learning rather than listening only. That shows a certain result in both dietary education and human resource development. Most of this series of activities were performed in cooperation with the local government and a neighborhood company. Some of their presentations were authorized by Kitakyushu-City as a business to be called “The authorization of business to exhilarate communities” in the year H27 and “Citizen-based town step-up planning business” in the year H28. The programs contribution to the community was recognized at the same time.

Keywords: a house of confectionary, food and nutrition education,
human resource development, regional partnership,
active learning,